九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

イェイツ愛憐詩抄 : 試訳

前川, 俊一

https://doi.org/10.15017/2332786

出版情報：文學研究. 66, pp.49-73, 1969-09-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

イェイツ愛憐詩抄

—試　訳—

前川俊一

老漁夫の冥想

波よ、おまえらは　たわむれる子供のように　わしの足もとで飛びはねるが
おまえらは燃え、閃(ひらめ)き、ささやき、ひたばしるが
いまよりも暖かだつた　あの頃の六月には　波はもつと陽気だつた
わしの心に罅(ひび)割れのなかつた童(わらべ)の頃は。

鰊(にしん)ももとのように汐に乗つて来なくなつた。
何てこと。獲れたての魚を　スライゴーの町に売りに行く
車の上で魚籠(びく)はしきりと軋(きし)んだものだ

わしの心に罅割れのなかつた童の頃は。

そして、ああ、誇りたかい少女よ、海上に彼の櫂音がきこえる時も
君はそれ程うつくしくない——暮れ方、浜辺の網のそばを
誇りたかく、離れてあゆんでいた　あの少女たちほどに
わしの心に罅割れのなかつた童の頃の。

魚

おまえは　月が落ちると　蒼白の潮の
満ちひきに　身を隠してしまうけれど
後の世の人々は
私が網を打つたこと
おまえが　いくども、いくども
ささやかな銀の網を飛び越えたことを知つて

お前が頑なで　情知らずだつたと思い
ひどい言葉でお前を責めることだろう。

さまようイーンガスの歌

私は頭が火照つていたので
はしばみの林に出かけた。
そして　はしばみを切り剝いで棒をつくり
いちごの実を糸につけ
白い蛾が飛び
蛾のような星がひらめき出す頃
いちごの実を流れにおとして
銀色の小さな鱒をとらえた。

それを床に置くと
火をおこしにかかつた。
しかし、さらさらと床に音がして
誰か　私の名前を呼ぶのだ。
それは　林檎の花を髪にかざした
微光を放(はな)つ少女になつていて
私の名前を呼んで駈け出し
明けゆく空に消えて行つた。

私は盆地や丘々を
さまよい歩いて年老いてしまつたが
彼女の行方をつきとめて
その唇に口つけし、その手を把りたい。
丈高い斑(まだら)の草地をあるきまわり
時がついに果てるまで
月の銀の林檎と

太陽の金の林檎を摘みたい。

恋する男　愛人の喪失をなげく

青白い額(ひたい)と　静かな手と　やわらかな髪
私はうつくしい友を得て
夢想したのだ、久しい絶望のおもいも
ついには　恋を得て　終るのかと。
ある日　そのひとは私の胸のなかを覗いて
そこに　あなたの姿を見た。
そのひとは涙を流しながらたち去つた。

言　葉

私はしばらくまえ　こう思つていた——
「私の愛するひとは　わかつていないのだ
この盲(めし)いた　わびしい国で
私が何をなしとげたか、なそうとしているか。」

そして私は太陽に倦(う)みつかれたが
やがて私の思いは晴れわたつた——
私は思い出したのだ、私のしとげた最高のことは
このことをわからせるためだつたことを——

私は毎年こう叫んで来たことを——「とうとう
私の愛するひとはみんなわかつてくれた。
それは私に力が出来て
言葉が私の意のままになるからだ」と。

彼女がわかつてくれていたら
篩(ふるい)から何をふるい出していたか　わかりはしない。
私は貧弱な言葉を吐いて
生きることに満足したかも知れないのだ。

飲みてうたえる

酒は　口より入り
恋は　眼(まなこ)より入る。
年老いて　われら逝くまで
これのみぞ　悟らむ真実(まこと)。
われ口に　さかずきを挙げ
君見ては、つく吐息(といき)かな。

時とともに叡智はきたる

葉は多くとも　根はひとつ。
わが青春の虚偽(いつわり)の日々を
私は陽光に葉や花をゆらめかせたが
いま私は真理へと凋落しよう。

仮面(マスク)

「エメラルドの眼をして　金色に輝くそのマスクを
はずしなさい。」
「いいえ、あなた、心が荒々しくて、賢くて
しかも、つめたくないかどうか
たしかめようとなさるなど。」

「私、そこに何があるか　知りたいのです
愛か、いつわりか。」
「あなたの心をとらえて、胸を高鳴らせたのは
マスクでした。その奥にあるもののせいではありません。」

「ですけど私、あなたが敵でないことを
たしかめたいのです。」
「いいえ、あなた、なにもそのままに。
どうでもよいではありませんか、火さえ燃えさかつていれば
あなたのうちに、わたしのうちに。」

風に踊る子供に

そこの浜辺で踊りたまえ。

イェイツ愛憐詩抄（前川）

風や波がわめこうと
構うものか。
飛沫にぬれた髪の毛を
精一杯振りたてるのだ、
愚か者がのさばり
得た恋がすぐと失われ
たばねる麦束は沢山あるのに
最高の働き手は死んだことを
年わかの君はまだ知らない。
ものすごい風の叫びなど
恐れることはないのだ。

二年後

その大胆でやさしい眼ざしに

学問のかがやきが欲しいと言うひと
蛾は焼かれるときに　どんな切ない思いをするか
言いきかせてくれる人はなかつたのか。
僕も言つてあげたかつたが、君は若いし
おたがいの間に、話は通じないのでね。

おお、君は申し出とあれば何にでも応じ
世間の人はみんな味方だと思い
君のお母さんがかつて悩んだように悩み
そして、しまいには同じように　失意の身になるのだ。
だが僕は年寄りだし、君は若いし
これも不躾なよそ言さ。

クール湖の白鳥

樹々はうつくしく紅葉(もみじ)し
林間の小径(こみち)はかわいている。
十月の薄明のもと、水面は
静かな空をうつしている
満々たる水の上、石の間(あいだ)に
五十九羽の白鳥がいる。

はじめ私が数(かず)をかぞえてから
十九度目の秋が巡(めぐ)って来た。
私は見たのだ、かぞえ終るよりも先に
さっといっせいに飛び立ち
かしましい羽音を立てて
大きく弧をえがき、旋回しながら　散って行くのを。

あの素晴らしい生きものたちを目にして
いま私の心はいたむ。
すべてが変つてしまつた
私が薄明に、はじめてこの岸に来て
頭上にかれらの鐘のような羽音をききながら
軽やかな足どりで　あゆんだ頃から。

いまも飽きず、かれらは恋人同志
つめたい、なじみの流れに
およいだり、舞いあがつたりしている。
かれらの心は老いを知らない。
いずこをさまようとも
情熱が、征服が、かれらについてまわる。

しかし、いま彼等は　静かな水面に浮いている
妖(あや)しく、うつくしく。
そも、いずこの藺草の間に巣をつくり

イェイツ愛憐詩抄（前川）

いずこの湖や沼のほとりで
人々の眼をたのしませることか、ある朝(あした)　わたしが目覚めて
かれらの飛びさったのを知るとき。

人は年とともに円熟する

わたしは夢みることに疲れはてた。
雨風(あめかぜ)にさらされて　流れに立つ
大理石の海神(トライトン)だ。
そして終日わたしは
この女性の美をながめるのだ
丁度書物のなかで
美人の絵を見つけたときのように
眼や　ききわけの利(き)く耳を
堪能(たんのう)させたことに満足し

ただ　賢くあることをよろこんで。
人は年とともに円熟するからな。
だがしかし、だがしかし
これは私の夢か、真実(まこと)か。
ああ、わたしが　燃える青春の持ち主だつた頃
わたしらが逢えていたらなあ。
しかし、私は夢みながら老いゆくのだ。
雨風(あめかぜ)にさらされて、流れに立つ
大理石の海神(トライトン)だ。

若い少女に

ねえ君、誰よりも
僕は知つてるよ
君の胸がなぜそんなにときめくか。

イェイツ愛憐詩抄（前川）

君のお母さんだつて
僕ほど知つてらつしやらぬ。
僕は胸つぶれる思いをしたのだ
君のお母さんが、いまはお認めにならず
また、憶えておいででない
狂熱のおもいに
御自分の血をさわがせ
眼をかがやかせたとき。

学者たち

御自分の所業(つみ)を忘れてござる禿頭(はげあたま)たち
老いて、博学で、徳たかき禿頭たちが
編し、註したもう
若者らが寝床で寝がえりを打ちながら

美人の無智な耳に媚(こ)びようと
身を焼くおもいでひねり出した詩句を。

そこでは誰も足をひきずる。インキにまみれて咳をする。
誰も靴でカーペットをすりへらす。
誰もほかの人の考えることを考える。
誰も隣人の知っている人間を知っている。
神よ、彼等のカトゥルスが　そんな行きかたをしたら
彼等は何というか。

明けがた

僕は明けがたのように無知でありたい
胸飾りの留針(ピン)で町を測る
老いた女王を見おろした明けがたのように

それとも、衒学の都バビロンから
惑星が気まぐれの軌道をあゆみ
星が消えるあたりに月が出るのを見て
石板をとつて算数をする
萎(しな)びた人間どもを
見おろした明けがたのように。
僕は雲のような牽き馬の肩の上に
きらめく四輪車をゆすぶつて立つだけの
明けがたのように無知でありたい。
僕は――およそ知識など藁しべ一本の値打もない――
明けがたのように無知で奔放でありたい。

かたい誓い

あなたが　あのかたい、かたい誓いを

反古にしたので、私もほかに友達が出来た。
しかし、私が死と向かいあうとき
眠りの高みに攀じのぼるとき
また酒に喰らい酔つたとき
いつも、不意にあなたの顔を見るのだ。

カイル・ナ・ノウの栗鼠に

ここに来て　僕と遊ばないか。
そんなに樹をゆすぶつて
逃げんでもよかろう
君を仕とめようと
僕が銃でも構(かま)えてるみたいに。
僕はただ

イェイツ愛憐詩抄（前川）

君の頭(あたま)を撫でてから
左様ならをしたいのさ。

青春と老齢

若い頃　世間は私を抑えつけて
えらく憤慨させよつたが
今度は、腰をあげかかつた客を
御世辞で追い立てよる。

レダと白鳥

不意の一撃。よろめく少女の上に
巨大な翼(つばさ)は羽ばたきをつづけ、彼女の腿(もも)を

暗い蹼が撫でる。うなじは嘴にとらえられ
彼はあらがうすべなき彼女の胸をおのが胸に抱く。

何とて、あの怯えきつた　うつつない手が
ゆるみ行く両の腿から　羽ばたく輝きを　押しのけ得よう。
何とて、あの白色の急襲に　潰え去つた身が
あやしい心臓の鼓動を　その横たわる場に　感ぜずにいられよう。

腰部のおののきは　そこに　もたらすのだ
くだかれた城壁と　燃える屋宇と高塔と
そしてアガメムノンの死を。
かく攫み上げられ
かく、天つ空の猛き血になびかせられて
彼女は彼の力とともに　叡智を身につけおうせたか
嘴がひややかに　彼女を放し去るとき。

子守歌

可愛いひと、たんと召しあがつて
そのまま　すやすや　おやすみなさい。
偉大なパリスが、あの最初の明けがた
黄金の臥(ふ)しどで、ヘレンの双腕のあいだに
眠りを見いだしたとき、彼にとつて
全世界の驚きが　一体何だつたでしょう。

可愛いひと、おとりなさるがいいわ
薬が存分にまわつて
槲(かしわ)や楠(ぶな)の枝の下を
自在に雄鹿がはしり、雌鹿が跳ね、
雄鹿が跳ね、雌鹿がはしるようになつたとき
狂熱のトリストラムが味わつたような眠りを。

あの聖なる鳥が　その地で
宿命(さだめ)の意(おもい)をとげ
レダの肢体から離れ落ちて
なおも　彼女のやさしいいたわりに　身をまかせたとき
ユーロータスの岸辺におりたような
そのような　すこやかな眠りを。

久しい沈黙のあと

久しい沈黙のあとの語らい――
ほかの恋人たちは疎遠になるか、死に絶えたいま
非情のランプの光を笠で覆い
幕(とばり)をおろして非情の夜をしめ出し
至高の主題――学問と詩歌(うた)について
しみじみと、しみじみと、語りあうことのよろしさ。

イェイツ愛憐詩抄（前川）

肉体の老衰(おとろえ)は叡智だ。若いころ
わたしらは愛し合っていたが、無智だった。

霧や雪のように狂って

鎧戸をとざし、閂(かんぬき)をさしたまえ
いやな風が吹いているから。
今宵　僕たちの心は最高だ。
そして、僕にはわかる気がする
僕たちの外の一切は
霧や雪のように狂っていることが。

あそこ、ホーマーのかたわらに　ホラスが立ち
下段にはプレイトー
ここにはシセロの頁が開いている。
もう何年まえになることか

無粋の若者だつた君や僕が
霧や雪のように狂つていたのは。

なつかしの友よ、君はたずねる――「なぜに君は
ためいきし、身ぶるいするのか」と。
僕は身ぶるいし、ためいきをつくのだ
こう思うとき――シセロでさえも
いや、数多(あまた)の心魂を具えたホーマーでさえも
霧や雪のように狂つていたのだと。